

Title	Thomas K. Keefeの新著によせて：中世史研究に於けるコンピューター利用
Sub Title	
Author	森岡, 敬一郎(Morioka, Keiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1984
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.54, No.1 (1984. 8) ,p.74, 96- 74, 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	余白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19840800-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Thomas K. Keefe の新著によせて

—中世史研究に於けるコンピューター利用—

一般に歴史研究者は保守的で伝統墨守的であるといふのが一般的の通念である。また単に通念ではなく、事実もそうであるかも知れない。少くも、血口自身を省りみて、こうした非難をうけて仕方がないと思うことが多い。本塾の我々の友人でも、経済史では既に早く速水教授が人口動態論を歴史解釈の上に取り入れ、これに伴つてコンピューター処理を歴史研究の手段として利用され、種々の成果を挙げられているし、また、政治学で選挙を研究されている堀江教授などもコンピューターを利用していられる。また史学科でも民俗、考古の方面では、多様な新らしい研究手段が利用されている。しかし、伝統的な史学ではどうなのか。私自身については、新らしい方法や研究手段に対して余り積極的に発言したことにはなかつた。

昨年、夏休みを利用して渡英し、小規模な学会に参加し、また旧師・旧友にお目にかかることが出来たが、このややかな体験で深く考へる所があつたので、誠につまらぬ個人的な感想に過ぎないけれども、記しておきたい。

昨年七月下旬にサセックス大学で開かれた第廿二回 Conference International Commission for the History of Representative and Parliamentary Institutions に参加することができた。規模は大いに大きかったが、極めてアカデミックな感じの氣持のよき雰囲気であった。この学会のことは別にまた機会があれば述べるが、今や聞こださのは、この Conference の第一日田辺、Valerine Cromwell 女史（サセックス大学）の発表された「一八六一年一九二六年の House of Commons の Division Lists の分析」と題する発表である。これが、この時期の

下院議員の議会に提出された法案に対する賛否と選出母体との関係を再検討して見ようとする試みの中間報告であった。これのために、各議員が、各法案の各条項毎にどのような態度をとったかを一つ一つ追跡し、また、選挙の投票毎に、当選者、落選者の夫々の得票を集め、更に、投票区毎の社会経済的性格を調査し、これらのデータを集めて、コンピューター処理したものであつて、発表の際には、数枚の多色で点や記号の記入されたチャートが示されそれについての説明が行なわれた。私の英語力不足に加えて、コンピューターによるデータ処理法に対する全くの無知のために、その内容は理解出来なかつた。後で伺つた所では、このデータの多くは、西南部の大学のセンターにコンピューター化されているとのことである。しかし、参会者の多くが、比較的高令の学者も、活発に討論していたには驚かされた。

その学会の終了後ケインブリッヂの J.C. Holt 教授と、シェフィールドの E. King 博士にお目にかかつた。イングランド中世史に於いてコンピューターによる情報処理の中心は、周知のように、University of California の Santa Barbara 分校であり、その主宰者は、C. Warren Hollister 教授である。（Albion 誌はその機關誌）。J.C. Holt 教授は、かつて「封建制度」の解説をめぐって Economic History Review 誌上で論争し新しい立場（連續説）に対し伝統的な立場を強く擁護されたことは、我が国の我々年代の研究者で記憶されている方も多いであろう。要するに、画教授は譯はば讐敵であり、立場を異にする一派の領袖とも言へる。がた King 博士にして、Peterborough の文書をめぐって Hollister 説の批判者である。しかし、画教授は Hollister 教授は招かれ Santa Barbara 校に出講されていて、非常に親密でねえあるひとが判つた。これは誠に羨しいことである。更に強調したのは、次のじつである。即ち Holt

（九六ページく続く）

教授は六〇才を超えた長老で、コンピューター処理の効用については、可成り限定的な評価をもつておられる。（この点は King 博士も同じ）。しかし、限定された分野では充分な効用をもつことは認めねられるし、また、若い学者といつた問題について話せる知識をもつておられる。Holt King 西氏から Santa Barbara など、Henry II の一一六六年の封建授封関係の調査の際に各国王直属封臣が報告した復命書を中心に、当時の封建関係の諸データが今後データーに収録されていこうとした。

数日前 Thomas K. Keeffe; *Feudal Assessments and the Political Community under Henry II and His Sons*, (University of California Press, 1983) が刊行された。著者 Thomas K. Keeffe は Hollister 教授の門下生で、North Carolina の Appalachian State University の Assistant Professor との事である。現在まだ内容の一部を紹介するだけ充分に読む時間がなきので残念であるが、読んだ限りでは、上に述べた Santa Barbara 分校のデータベースを利用した成果であることは、充分窺い知る事が出来る。特に本文中にある二十六枚の図表と Appendix I~IV の詳細な Table とはコンピューター処理の成果である。そして J. C. Holt 教授も、本書に対する批判としてアンジュー朝が、意図した封建的諸階級に対する搾取政策が封建的有力者によっては巧みに回避されたとする Kaefe の結論を高く評価している。これは多量のデータの利用によって可能になつたのである。

要するに、コンピューター利用が否かではなく、重要なのはコンピューターの有効な利用を歴史学の上でもっとと考え、取り入れ行くべきである。ということである。また、このことと関連して、歴史の方法論の上でも、考えて行かなければならない点が多くある。哲学的立場での英・米に於ける新らしい方法論の紹

介はされてゐるが、それ歴史研究の実践と絡ませた上で批判的摂取が今後の課題として一層努力する必要のある点であろうし、また、社会学、人類学などの新方法論の紹介も盛んになされるとべきである。更に、基本的データのコンピューター化、など、新しい研究に対応する施設の問題も考えて行く必要があろう。また、コンピューターの歴史学会の利用の問題は相当に古い。例えば、既に一九七四年に刊行された Open University の教材にも The Quantitative Analysis of Historical Data (by Michael Drake) が出てゐる。これは、易しい入門書で、研究手続が書かれている。一般に、新しい研究手段には、種々のものがいる。写真、口伝、レコードなどが、既にヨーロッパの歴史では、大中に利用され、その方法についての入門書もある。例えば、古く一九六一年に出版された L'Histoire et ses méthodes, (Encyclopédie de la Pléiade.) (sous la direction de Charles Samaran) は、その意味で、便利なものである。所謂「ナル派」バーマドであるが、こうした研究入門なり、更には、その史学の基くフランス社会学の発展も、あわせて紹介されるべきである。こうすれば、松本信広、田辺寿利、古野清人といった戦前の歴史の業績との接合もはかられるであろう。

（森岡敬一郎）

（追記）

ル・ロワ・ラデュリの『歴史家の領域』には、コンピューターの方法についての記述が相当あるが、同書の邦訳『新しい歴史』（新評論）は、一部を省略してあるので、この方面的論文が殆んどない。シリウの『歴史学の伝統と革新』（九州大学出版会）にて行くべきである。ということである。また、このことと関連して、歴史の方法論の上でも、考えて行かなければならない点がある。